

亡霊の過去を表す「愛されるべき」ビラブド、  
愛を表す現在の「愛されている」ビラブド

飯島 昭典

## はじめに

文学用語「サザン・ベル」(Southern-Bell)の語源はレイプである。アメリカ文学を志す若い学徒が用語事典で経験する衝撃の一つである。南部奴隷制度下では、白人男性は黒人女性を恣意的にレイプする事が出来、その結果白人男性は、黒人男性の報復の恐れと、白人女性への罪悪感から、南部における白人女性を祭り上げ、そこに南部淑女、「サザン・ベル」が生まれた。これが「サザン・ベル」の語源をレイプとする文学用語の説明である。報復の恐れをという観点では、KKK団による黒人の排除の動きも関連付ける事が可能であるかもしれない。

もちろんトニ・モリソン(Toni Morrison, 1931-)のピューリッツァー賞受賞作品『ビラブド』(Beloved, 1987)<sup>1</sup>は「サザン・ベル」を扱った作品ではない。白人による黒人への暴力と搾取の結果から生まれた文化表象の一例を、本稿の導入として挙げたまでである。『ビラブド』は過去の虐げられた黒人の運命を人々に忘れさせず、現在でも続く差別の解消を可能にする問題作である。ここに描かれた黒人への暴力と搾取は言葉に窮するほどのものである。

作品タイトル『ビラブド』がそのまま作品の登場人物であるビラブド(Beloved)という身元不明の若い娘の名と一致するのだが、このビラブドに対して様々な批評家が解釈を与えている。リンダ・クルムホルツ(Linda Krumholz)は「愛されなければならない過去の忘れた精神」("the forgotten spirit of the past that must be loved") (95)として働く肉体を持った存在としている。そしてキャロライン・ロディ(Caroline Rody)は、復活を果たして訪れた亡霊のビラブドは、セテ(Sethe)<sup>2</sup>、あるいはモリソン自身の民族の過去における対話を表す碑文のようなものである、としている(98)。またある批評家は「ビラブドが再び肉体を持つことはセテの痛ましい抑

圧された奴隷としての過去、それは忘れたいし、思い出していない為に未だに彼女自身で解決し、受け入れていない数多くの記憶の復帰と一致している」(“Beloved’s reincarnation corresponds to the return of many of Sethe’s painful repressed memories of her enslaved past, of what she has not yet resolved or accepted since she desires to forget or disremember the past”) (Koizumi)と説明している。

ビラブドに対してこのように過去との関連で意味づけを行うのは見当違いの事ではない。作品の献辞は「6000万余りの人々」(Sixty Million and more)に対してであるし、セテの子殺しの罪悪感からくる過去へのトラウマの表れと考えるのは当然の事と言えるであろう。私はそれに異を唱えるつもりは全くない。

しかし、私はここで違った意味づけを試みようと思う。作品中の忌まわしき暴力の連続の中で、かえって異彩を放つものがある。それは愛である。主人公セテが娘デンヴァー(Denver)を生んだ時に感じるのと同じ女性としての白人の少女エイミー(Amy)が与える母性愛である。少女エイミーは16歳足らずの少年が喋るような様子の女性だが、お産を手伝い、自らの名前の一部であるデンヴァーの名を与える様子は、母親的特性を持っており、実際に娘を産んだセテとは、母親的感情を共有している、と考えても間違いない。その意味で少女エイミーがセテに与えるのは、母性愛なのである。あるいは、母性愛を分かち合っているのである。そして夫の母親ベビー・サグズ(Baby Suggs)がセテに与える「愛は彼女がこれまで知っていた肌を合わせるどの愛にも劣らなかった」(“love was equal to any skin-close love she had known”) (112)ものである。これは擬似的な親子の愛である。そしてセテにアルファベットや縫い物を教えた仲間は、同じ奴隷としての同胞愛をセテに与えた。そして「彼が何を話そうと、また何を知っていようとも、彼女は自分の人生に彼が欲しか

った」( “ No matter what he told and knew, she wanted him in her life ”) (116)と考えるポールD (Paul D)の愛は作品の主要なテーマともなり得るものである。

圧倒的な印象を残す暴力と搾取の中で見られるこのような「愛」の存在は、作品を解釈する上で重要なものではないか、と私は考える。ビラブドを過去との関連においてのみ考えるのではなく、違った意味を提案するのが本稿の目的である。この目的を果たすためにビラブドがセテ、ポールD、デンヴァーの元から消える意味を明らかにする。これを明らかにすることは『ビラブド』の作品タイトルに、ビラブドが表す過去の他に違った意味を与える事を可能にするのである。

## 1. 搾取の構造

作品中には搾取され、虐げられる黒人の様子が男女ともに描かれている。性的暴力と閉塞、飢餓、肉体的苦痛、不合理な死などが特徴的である。スウィートホームの元の管理者であったガーナー (Garner) は一見すると、人情を奴隷に示している人物に思える。しかし、彼の名前ガーナーが暗示する garner という単語の意味、「収穫して蓄える」は彼の隠れた素性と一致するものではないだろうか。彼は自分の奴隷に対する扱い方の温情を殊更に自慢する。「スウィートホームでは私の黒んぼはみんな、一人前の男だ。男として買って、男に育てた。全員だ」( “ Now at Sweet Home, my nigger is men every one of em. Bought em thataway, raised em thataway. Men every one ”) (12)。彼のこの発言は決して優しさを表すものではなく、明らかな生産物としての奴隷を感じさせるものなのである。彼の奴隷の名がポールD・ガーナー、ポールF・ガーナー、ポールA・ガーナーとアルファベットの違いだけで同じ

名前が連なるのは、彼が自分の持っている黒人を生産物、財産として考えている証拠となるものである。この事は半藤 正夫の述べる「どんなにやさしく扱われていても、所詮奴隷、彼らの命は白人に握られていることにはかわりはない」(65)という、黒人奴隷自身の主体性の無さと一致を見るものである。生産物、財産としての存在は当然の事ながら、人間的主体性は有していない。自由が許されていたとしても、それは飼われている動物が享受する自由のようなものである。つまり「モリソンは生産の手段として奴隷の身体への投資を描き、その無慈悲な乱用は奴隷所有者が行う、一つの恐ろしい奴隷制度の様相をあらわしている」(“Morrison depicts the investment of slaves’ body as a means of production and the ruthless abuse of them by slaveholders as one of the horrendous aspects of slavery”)(Farshid 497)をという事を裏付けるものなのである。

また物としての存在の彼らは、性的な閉塞状態に置かれている、という見えない暴力を受けてもいる。その事がわかる説明をここで引用してみる事にする。ガーナーは自分の奴隷は「一人前の男」(“men”)(13)であると考える。

And so they were: Paul D Garner, Paul F Garner, Paul A Garner, Halle Suggs, halle Suggs and Sixo, the wild man. All in their twenties, minus women, fucking cows, dreaming of rape, thrashing on pallets, rubbing their thighs and waiting for the new girl. . . (13)

確かに彼らは一人前の男だった。ポールD・ガーナー、ポールF・ガーナー、ポールA・ガーナー、ハーレ・サッグス、それから野人のシックソウたち。全員20代で女を持たず、牝牛を犯し、レイプする事を夢見て、わ

ら布団の上でのたうち、太腿を互いにこすり合わせて新しい少女を待っていたのだ……

奴隷たちの異常な性的閉塞感がわかる場面である。この異常な状態はひとえにガーナーの彼らの扱い方によってのみ引き起こされたものなのである。

スウィートホームの持ち主がガーナーから先生 (schoolteacher) に変わると、奴隷への扱いの非人間性は明らかなものとなる。トウモロコシをもちだり、めんどりの忘れていた卵を取りあげる事など、「彼らが触れるものはすべて盗みとみなされた」 (" everything they touched was looked on as stealing ") (225) という監視と拘束が強化されたのである。銃を取りあげられた彼らは、食料を得る事が難しくなり、「本気になって、こそどろをするようになり、それは権利だけではなく、彼らの必要事となった」 (" they began to pilfer in earnest, and it became not only their right but their obligation ") (225)。ガーナーの施した性的な飢餓に加えて、先生は食料に対する飢えも与えた事になるのである。また、こそどろが必要事になったという状態は、監視の目を常に意識しなければならない、という精神の緊張状態が増した状態に置かれるものでもあるのである。

また先生が教える子どもの生徒たちへの指導にも、先生の奴隷への態度が良く表れている。生徒が主人公のセテに対して特徴を記していると、先生は生徒にこう注意する。「違う、違う。そうじゃない。彼女の人間的特徴は左側に書けと言ったんだ。動物的特徴は右側だ。すっかり書き尽くすんだぞ」 (" No, no. That's not the way. I told you to put her human characteristics on the left; her animal ones on the right. And don't forget to line them up ") (228)。人間的特徴と動物的特徴の列挙という指導は、明らかに物としての存在が前提になっているのである。一人の人間であるセテ

に対して人間的特徴を記させるのは、彼女が人間ではない存在というのを暗示させるものである。奴隷という身分であるので、当然先生が考えているのは人間以下としての存在である。

また右側に動物的特徴、左側に人間的特徴という左右の区別も一種象徴的である。ユダヤ・キリスト教の伝統で、右と左は象徴的に対比され、右は良い方であり、左は悪い方とされている。マタイ伝における時の終わりの最後の審判で選ばれた者は審判者キリストの右側、断罪された者は左側に置かれるなど、聖書中には左右の意味づけの差は多数みられる。<sup>3</sup> 右側の動物的特徴を良い事、左側の人間的特徴を悪い事と考えるならば、セテの特徴が動物的側面が望ましいものである、という事になる。こうした事からも生徒に教える先生の自分の奴隷に対しての人間性の軽視が見受けられるのである。

黒人奴隷を搾取するのは必ずしも白人だけとは限らない。主人公セテが殺した我が子の生霊であるタイトルと同じ名前のビラブドは、家族同様に一緒に住み始めるようになる。しかし、ビラブドの要求はとどまる事を知らない。「要求を出すのはビラブドであり、欲しい物が手に入り、セテが与えるものがなくなると、要求をわざわざ作り出した」(“ it was Beloved whomade demands. Anything she wanted she got, and when Sethe ran out of things to give her, Beloved invented desire ”) (283) という状況は、セテを疲れさせ、指のリングが弛んでしまうほど彼女を痩せさせてしまう。それとは反対にビラブド自身は「日ごとに太く、丸くなっていった」(“ she was getting bigger, plumper by the day ”) (281)。手にすれば手にするほど要求を出すビラブドの様子は、海水を飲むが如きの渇きと飢えの状態と言えるが、これはビラブドの要求というよりは、ビラブドを愛せなかったセテ自身の子供に対しての償いの気持ちと言えるであろう。ビラブドの要求する「甘い物」(“ sweets ”) (281) は愛情の表れであり、それは愛せなかったとセテ

自身が感じる我が子への与えても与えきれない愛情なのである。ビラブドの要求は、セテの愛したいという要求の歪みである、と思われるのである。この事を石川 和代は「主人公 Sethe が甦って来た娘に傾ける愛であり、子どもの時十分に世話してやれなかった分を取り戻そうとする」(241)行動である、としている。罪悪感について石川は述べていないが、作品中の「セテは何度も繰り返し理由を並べて許しを求めた。ビラブドは自分の命よりずっと大切な意味があるんだよと」(“ Sethe pleaded for forgiveness, counting, liting again and again and again her reason: that Beloved was more important, meant more to her than her own life ”)(284)というくだりはこの事を証明するものとなろう。

子供を殺すという状況は異常である。しかし、それが行われる理由はやはり黒人に対しての暴力と搾取があるのである。ビラブドがセテを搾取する理由の根源には、子を思う母親が見せた「子を殺した方がまし」、という黒人への搾取が原因なのである。

ここではガーナーの黒人の扱いと、先生の黒人の扱いは、人間としての扱いではなく、所有物としての扱いであり、本質的には変わらない事を示した。そしてビラブドという子の親に対する搾取の原因は、親が感じる罪悪感であり、大元をたどればやはり黒人への暴力と搾取なのである。黒人問題を鋭く描くモリソン作品において、奴隷の問題は避けては通れない問題である。黒人奴隷に対する搾取は、愛情の歪みすら生じさせるものである。我が子を愛する事すらできない奴隷の状況は、搾取が生じさせるものの最大の悲劇と置いていいだろう。

## 2. セテの傷を癒す不完全なポールD



このような黒人奴隷への搾取の最大の被害者はやはり主人公セテである。セテが与え尽くす事の出来ない愛を娘のビラブドに与え、それによって苦しむ姿は既に述べた。「もし私が娘を殺していなかった、娘は生きながら死んでいただろうし、そんな事があの子の身の上を起こるなんて私には耐えられなかった」 (“ if I hadn't killed her she would have died and that is something I could not bear to happen to her ”) (236) という説明は、悲しみに耐えるべく悲しみを享受するという、愛の欠落したセテの様子を描いている。

セテにとって最大の心の傷は、子殺しである事は言うまでもないことだが、彼女の愛の欠乏は作品中に点在している。セテの母は何人もの白人の船員からレイプを受け妊娠させられ子を海に捨てられる、という扱いを受ける。そしてセテ自身も酷いレイプを経験し、それを目撃してしまった夫のハルは狂気に陥り、バターを顔に塗ったくって死に至る、という二重の苦しみ、つまりセテ自身の尊厳と夫の存在と言う二つのものを、白人によって奪われるのである。

そしてセテに対しての凌辱で必ず注目しなければならないのは、自分の娘の墓に名前を彫ってもらう時に彼女が経験するレイプである。「10分間我慢すりゃ、ただでやってやるよ」 (“ You got ten minutes I'll do it for free ”) (5) という石工の交換条件に泣く泣く折れるセテは、「ビラブド」 (“ Beloved ”) (5) という7文字を墓に刻んでもらう事になる。この場面の、死んだ娘を思いながら彼女の名を墓に刻む、という行為は石工からのレイプという暴力によって汚されるのである。娘に対して示す母親の愛情は、見知らぬ男にレイプされるという汚れを同時に持つものなのである。愛と暴力という相容れない価値観がここには併存している。 作品冒頭のエピグラフをここで引用してみたいと思う。

I will call them my people,

which were not my people;  
and her beloved,  
which was not beloved.

Romans 9:25

私は彼らを私の民と呼ぶのだ、  
私の民でなかったものを。  
そして愛されし者と呼ぶのだ、  
愛されなかった者を。

ローマ使書 9 章 25 節

この聖書のエピグラフには相容れない矛盾する要素が並置されている。上の石工のレイプも愛と暴力という二面性を表しているが、セテにとって二面性は顕著にみられる特徴のひとつである。作品のこの聖書の引用の二面性は、必ずしも無関係ではないのである。

スウィートホームの管理者がガーナーから先生へと代わってセテが被った暴力に、鞭で打たれるというのがある。「先生が一人に私の背中をぱっくり開けさせて、傷が治ると背中が木になった」(“ Schoolteacher made one open up my back, and when it closed it made a tree ”) (20) という背中は、「桜の木の枝」(“ the branch of her chokecherry tree ”) (20) を有しているが如くである。本来なら美しい桜の付いた自然の木の枝が表しているのは、身体に残る隆起した血のにじむ傷跡である。この背中の傷について<sup>4</sup>も美しい物とおぞましい物、という矛盾するふたつの特徴が併存しているのである。そして創世記における善悪を知る知識の実を有する木は、至福と永遠性を意味するが、セテの傷は不幸と傷跡という望ましくない継続性を表している

点で、この意味でも二重の意味を読み取ることが出来るのである。

セテは娘を失い、夫を失い、自身の尊厳を失い、心にも身体にも傷を負っている登場人物である。愛される事に慣れていない彼女が欲するのは、ポールDが可能にする愛の享受なのである。しかし、傷を負ったセテに愛を与えるべくポールD自身も傷を負っている男であり、完全性を持っている男、とはいう事が出来ないであろう。

セテ、デンヴァー、ビラブドの結びつきは非常に強いものがある。セテにとってビラブドは娘であり、デンヴァーにとっては寂しさを忘れさせる姉である。デンヴァーはビラブドに対して「彼女が好き。本当に好き。いてほしい時にはいつだってやってきて、一緒に遊んでくれた。姉さんは私のもの」(“ Love her. I do. She played with me and always came to be with me whenever I needed her. She's mine ”) (247) というように愛情を傾ける相手となっているのである。セテにとってビラブドは愛しきれなかった娘という存在であり排除できないものであるが、デンヴァーにとってもビラブドは、心を通わせる存在となっているのである。

実際にデンヴァーとビラブドは一種の不思議な交流を行っているのではないか、と思える場面がある。ビラブドの姿が消えて、森の小川の流れを覗き込むデンヴァーは、自分の顔の隣にビラブドの姿を見る、という不思議な体験をする(119)。本来なら水面に映るのはデンヴァーだけの姿のはずが、彼女はここで、ビラブドを見出すことが出来るのである。この場面のビラブドとの遭遇は、彼女たちの不思議な交流を物語るものである。そして、ビラブドがセテの娘である、と初めて見抜くのはどうやらデンヴァーらしいのである。セテと自分を置き去りにしないで、出ていかないと頼むデンヴァーは、ビラブドの手首を掴んで身を乗り出して必死に彼女に懇願する。そして、「彼女に言っちゃダメ。母さんにあんたが誰だか知らせちゃダメ。お願い、わかる？」(“ Don't tell

her. Don't let Ma'am know who you are. Please, you hear?") (89) というデンヴァーのビラブドへのお願いは、デンヴァーがビラブドの正体を見抜いた瞬間である。デンヴァーが死んだ姉の生まれ変わりとしてビラブドの正体をはじめに見抜いたのである。この事からもデンヴァーとビラブドの繋がり、強固なものであり、デンヴァーにとってビラブドは必要な存在である、という事が言えるのである。

しかし、ポールDはビラブドの存在を認めようとしなない。ビラブドの存在はポールDを腹立たせるだけなのである。ビラブドの何が気に入らないのか、と尋ねられてもはっきりと答えることも出来ずに、ただ何かがある、と不気味に思うだけで。 「ビラブドは光り輝いて、ポールDはそれが気に入らなかった」 (" Beloved was shining and Paul D didn't like it ") (76) という態度はビラブド自身にもポールDへの憎しみの感情を植え付けるだけなのである。

ポールD、セテ、デンヴァー、ビラブドの4人の生活は、親子のような生活になるのだが、ここには親子の関係を破壊するポールDの行動がある。ビラブドと二人きりになった時のポールDの様子をここで引用してみる事にする。

" Please call it. I'll go if you call it. "

" Beloved. " He said it, but she did not go. She moved closer with a footfall he didn't hear and he didn't hear the whisper that the flakes of rust made either as they fell away from the seams of his tobacco tin. So when the lid gave he didn't know it. What he knew was that when he reached the inside part he was saying, " Red heart. Red heart, "over and over again. . . . (137-8)

「お願い呼んで、呼んだら出ていくから」

「ビラブド」彼は言ったが、彼女は出ていかなかった。彼の耳には聞こえない足音を立て、女はさらに近くにやってくると、足音ばかりか錆の破片がタバコの缶の組んだところから剥がれ落ち、呻くような音を立てるのも聞こえなかった。なので、蓋があいても彼は気づかなかった。気が付いたのは、彼が体の内部に到達した時、「赤い心臓、赤い心臓」と繰り返し自分が言っている事だった。……

ビラブドとの性行為を暗示させるこの場面によって、ポールDとビラブドの擬似的親子関係は否定されたのである。ビラブドを子と認めないポールDのこの行為は、同時にセテとビラブドの親子の関係も認めない行為と言えるのである。なぜなら、妻となるべく女性の子供との性行為は、自分の男親としての存在だけでなく、セテとビラブドの母親と娘の関係も否定するものなのである。

セテによる子殺しを認めることが出来なかったポールDであるが、この事はポールDの不全性を表している。悲しみに耐えるべく悲しみを享受し、子殺しを行ったセテを認められないのは、ポールDの不全性なのである。そして、子殺しという破滅的な愛情の形を親と子の関係で理解できないポールDは、自分自身もビラブドとの性行為によって男親と子としての関係を保つ事は出来ない。セテとビラブドの親子関係の否定と自分とビラブドの親子関係の否定の通じるところは、セテとポールDとの結びつきも危うくするものなのである。こうした事はポールDの持つ不全性の証拠と言えるのではないだろうか。「何かを強く愛するのは、危険な事だ。特にそれが愛そうと決めた我が子だったらなおさらだ。一番いいのはほんの少しだけ愛しておく事だ、と彼は知っていた」(“to love anything that much was dangerous, especially if it was

her children she had settled on to love. The best thing, he knew, was to love just a little bit ") (54) という発言だけでも完全とは言えない彼の様子がわかるが、上のような説明はこうした彼の不全性を良く表しているのである。セテが愛し、そしてセテを愛するポールDは不完全な存在と言えるのである。

## 結び

しかし、不完全な男がセテを導くのである。傷を負ったセテと不完全性の結びつきは、愛という完全性を可能にする。

亡霊のビラブドの存在は、いわばセテの罪悪感と強く結びついた過去を代表的特徴とする登場人物である。ビラブドという過去が、セテ、ポールD、デンヴァーの3人の前から姿を消すのは、何らかの意味があると思われるのである。本稿の第1節では作品中の搾取の構造を明らかにし、ガーナーと先生の黒人の扱いは本質的に変わりがないという事、ビラブドのセテの搾取は元をたどれば人種差別に端を発するものである事を説明した。第2節では人種差別の被害者であるセテと彼女の傷を癒す不完全な、同じく傷を負ったポールDを説明した。この二人の結びつきと、ビラブドの消える意味は密接に結びついている、と思われる。

「俺とお前は誰よりも多くの昨日を知っている。俺たちには明日というものが必要だ」 (" me and you, we got more yesterday than anybody. We need some kind of tomorrow ") (322) と手を取りセテの顔に触れながら「お前、お前が一番だ、セテ、お前なんだ」 (" You your best thing, Sethe. You are ") (322) というポールの愛の告白は、彼のセテの子殺しの許しと二人の明るい未来を暗示させるものである。この時点でビラブドは既に消えてい

るのだが、セテ、ポールD、デンヴァーの3人の望ましい結びつきは、作品中盤でサーカスを観に行った帰りに現われる夕暮れ時の影に象徴的に表されている。3つの影は手をつないでいるように見え、この事は3人の精神的結びつきを表している、と思われるのである。実際にこれを見たセテは「これはいい兆し、これからの人生、きっとそうだ、と思い込んだ」(“ she decided that it was a good sign. A life. Could be. ”) (57)と意味づけを行っているのである。作品終盤のポールDのセテへの告白によって、この中盤の影法師の布石は、セテ、ポールD、デンヴァーの3人の愛のある生活の実現を見るのである。<sup>5</sup>

本稿の出発点は先行研究で示されている登場人物ビラブドの過去性の他に何か別の意味を持っているのではないか、というものだった。それに答えを出すために、ビラブドの消える意味を明らかにする、という目的を持っているのである。作品の終盤での愛の成就是、作品タイトルの『ビラブド』に違った意味を与える。つまり終末では、Belovedの意味が「愛されている」状態になるのである。子殺しの罪悪感という「愛されるべき」存在の登場人物 Beloved から愛の成就したセテが「愛されている」Belovedへと単語の意味が変化しているのである。言わば、亡霊ビラブドの名から、セテが愛されるという、主体の変化である。Belovedという単語の意味は、登場人物の名から、「愛されている」という辞書的な受け身の意味を持つものに変化するのである。亡霊のビラブドが消えるのは、娘の罪悪感という過去から、ポールDからの愛をセテ自身が獲得するという現在の意味への変化なのである。<sup>6</sup> ポールDという子殺しを認めなかった不完全な男は、セテの元に帰る事によって、それを許し、傷を負った女を本当に愛することが出来る事が示されているのである。ポールDの不全性は、セテの元に変える事で、未来を創る力となるのである。

以上の説明で本稿の目的は達せられたのではないだろうか。ビラブドが消え

る事は、罪悪感という過去の意味から、愛されているという現在の意味の変化なのである。ポールDが子殺しを知らずセテを愛することが出来るのは、互いの傷からの回復を予感させ、明るい未来を感じさせるものなのである。「どの作品も『愛』の千変万化の姿を描いているが、これこそ彼女が追いかけてきたテーマであった」(半藤 64)とある批評家が、モリソン作品を評しているが、『ピラブド』においても愛の成就是重要なテーマであり、愛の存在なくして、負った傷の回復はありえない事をモリソンは伝えているのである。子殺しという、搾取される側ではなく、実は搾取する側の狂気が原因で生じた悲しみが許された時、悲しみとは正反対の愛をモリソンは用意していたのである。



## 註

1. 以下『ビラブド』からの引用は、Toni Morrison、*Beloved*、Vintage International Edition、2004の版に拠る。
2. 翻訳者によって、セス、セサ、セタ、セテなどの訳語があてられるが、セテで統一する事にする。理由は創世記3章25節にセツ(Seth)というアダムの第3子がいるが、このSethに女性形を作るeが加わり、Sethe、発音が「セテ」になると考えるからである。
3. 例えば、詩編第109句、第121句、第142句では、右は人間の守護者である神の方向である。またイザヤ書63章12節には「主は輝く御腕をモーセの右に伴わせ、海を二つにわけた」。ルカ書1章11節ではザカリヤのもとを訪れ、彼の妻が男の子を生むだろうと告げた天使も、右側から現われており、良い知らせをもたらす使者は、常に右側からやってくる。
4. この背中の傷について「ざくろ」と説明している箇所があるが、ざくろの果肉や果汁の赤い色は受難で流されたキリストの血を思わせるものであり、セテが耐える苦しみ、作品終盤での愛の獲得による精神的な復活など、キリストの受難と復活とも重ね合わせる事も可能である。
5. 3という数字は完成を伝統的に表す。三位一体説などの考えによる。こうした事から、3人の生活の完全性、充足性とも考えられる。
6. もちろん、ビラブドが消える事でポールDとビラブドの擬似的な近親相姦の関係というタブーも消えるわけであり、この事からもビラブドの消える意味は大きい。ビラブドが消える事で、セテとポールDの結びつきは、一層強まる。

## 引用·参考文献

- Bast, Florian. "Reading Red: The Troping of Trauma in Toni Morrison's *Beloved*." *Callaloo* 34.4 (fall 2011): 1069-1087, 1116. Pro-Quest. Web. 7 Mar. 2014.
- Farshid, Sima. "Reclamation of the Exploited Body in Toni Morrison's *Beloved*." *International Journal of Science and Humanity*, vol. 2, No.6. (November 2012): 497-500. Pro-Quest. Web. 7 Mar. 2014.
- Fuston, Jeanna. "From the seen to the told: The construction of subjectivity in Toni Morrison's *Beloved*." *African American Review* 36.3 (fall 2002): 461-473. Pro-Quest. Web. 7 Mar. 2014.
- Handley, William R. "The house a ghost built: Nommo, allegory, and the ethics of reading in Toni Morrison's *Beloved*." *Contemporary Literature* 36.4 (Winter 1995): 676. Pro-Quest. Web. 7 Mar. 2014.
- Kurumholtz, Linda. "The Ghosts of Slavery: Historical Recovery in Toni Morrison's *Beloved*." *Toni Morrison's Beloved*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 79-95.
- Lee, Rachel. "Missing peace in Toni Morrison's *Sula* and *Beloved*." *African American Review* 28.4 (Winter 1994): 571. Pro-Quest. Web. 7 Mar. 2014.
- Luckhurst, Roger. "Impossible mourning in Toni Morrison's

*Beloved* and Michele Robert's *Daughter of the House* ." *Critique* 37.4 (Summer 1996): 243. *Pro-Quest*. Web. 7 Mar. 2014.

Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Vintage Books, 2004.

Rice, Alan. "Who's Eating Whom: The Discussion of Cannibalism in the Literature of the Black Atlantic from Equiano's Travels to Toni Morrison's *Beloved* ." *Research in African Literature* 29.4 (Winter 1998): 107. *Pro-Quest*. Web. 7 Mar. 2014.

Rody, Caroline. "Toni Morrison's *Beloved*: History, Rememory, and a Clamor for a Kiss. " *American Literature history* 7.1 (1995): 92-119.

石川 和代 「トニ・モリソンの『ビラブド』について」名古屋女子大学紀要 45 (人・社) 241-246頁、1999年、サイニー、(ウェブ、5月4日、2014年)。

小泉 泉 「ゾラ・ニール・ハーストン『彼らの目は神を見ていた』とトニ・モリソン『ビラヴィッド』におけるイデオロギー効果」日本女子大学紀要 文学部55 27-40頁、2006年、サイニー、(ウェブ、5月4日、2014年)。

半藤 正夫 「人種の扉を開いた奴隷女セーストニ・モリソンの『ビラブド』に見るレーシズム」新潟工科大学研究紀要 第12号 61-72頁、2007年、サイニー、(ウェブ、5月4日、2014年)。